三つの演劇用語について

山本修二

一

ブッチャーの『アリストートルの詩論、美術論』を読むと、その一二三頁に次のような章句がある——

「美的模倣の真の対象は三重である——すなわち ēthē と pathē と praxeis と。」

ブッチャーのこのような考えが、アリストートルの『詩論』の本文の芸術の媒体を論じた個所から示唆を得ていることは明かで、これもブッチャー訳を引用すると、以下のようになつている——

For even dancing imitates character, emotion, and action by rhythmical movement. (1447 a)

つまり ēthē と pathē と praxeis とに相当するものが、それぞれ character と emotion と action ということになる。

ところで、この三つの演劇用語の訳語が、これは当然のことながら、訳者によつて違つている。いま筆者の手元にある英訳本だけを比較しても、以下のようにまちまちである——

Twining (1789): manners; passions; actions.

Bouchier (1907): characters; emotions; actions.

Bywater (1909): men's characters; what they suffer; what they do.

Buckley (1914) : manners; passions; actions.

Potts (1953) : characters; experiences; doings.

（訳者の次につけた数字は、その本の発行年代をあらわす。）

上の表を通観すると、第三用語の praxeis の訳語が、最も一致しているようである。すなわち大体が‘actions’となつており、‘what they do’とか‘doings’とかいつても、どうやら「動作」というような観念に統一されそうな感じである。

第一用語の ēthē には‘characters’と‘manners’と二つの訳語があるようであるが、これは後に詳説するように‘manners’の古い用例は、ほとんど‘characters’と同意語であり、これも「性格」という観念に統一することができそうである。

一ばん種々雑多なのは、第二用語 pathē の訳語で「情緒」‘emotions’「情熱」‘passions’というような主観的な要素があるかと思えば「経験」‘experiences’とか、「彼等の受けたもの」‘what they suffer’とか、客観的な要素もある。この混乱から脱けだす一つの手掛りとなるものは‘passions’という訳語で、この言葉は現代でも、主観客観両面の意味があり、念のために *C. O. D.* を参照すると——

‘Passion’ (1) strong emotion; (2) sufferings of Christ on cross.

とあり、もつとも第二の客観的意味は「キリストの十字架における受難」に限定されているが、むかしはもつと一般的なものであつたことが、Weekley's *Concise Etymological Dictionary* などを見てもわかる——

‘Passion’: F. *passion*, L. *passio-n-*, from *pati, pass-*, to suffer; also used in Late L. to render G. *pathos*, feeling, emotion.

この記述は簡単ではあるけれど、いろいろの示唆を含んでいる。すなわち前にもいつたとおり、‘passion’の「受難」という客観的意味が、もとは一般的であつたこと、それからこの‘passion’というラテン語が pathos（いうまでもなく

pathē の単数）というギリシャ語の訳語として使われたこと、などである。

ところで、上述のウィークレーの説明を読むと、ギリシャ語の pathos には、ラテン語の passion の含む主観的意味、すなわち「感情」「情緒」だけの意味しかなかつたようにも受けとれるので、念のためにリデルとスコットとの『希英辞典』の‘pathos’のところを参照すると——

(1) anything that befals one, a suffering, misfortune, calamity. (2) a passive condition; a passion, affection.

とあり、もともと pathos という言葉にも、すでに主観と客観と両様の意味があつたことを知るのである。

すなわち pathos の客観的意味「苦しみ」「不幸」「災害」からは‘*path*ology’「病理学」その他の意味が派生したであろうし、その主観的意味、すなわち「受動的状態」「激情」「感情」からは、‘sym*path*y’「共感」その他の意味が派生したと思われる。ここで注意を要することは、リデルとスコットとの『希英辞典』が、この言葉の第二の意味、すなわち「激情」「感情」の前に、特に「受動的状態」‘a passive condition’という意味を掲げていることで、考えて見れば、‘passive’という言葉は、あえてウィークレーを煩わすまでもなく——

‘Passive’: L. *passivus*, from *pati*, *pass*-, to suffer とあり、これは‘passion’と同じ語根から出て、いわば‘passion’の形容詞が‘passive’だと考えてもよかろう。

既述のとおり、ギリシャ語の pathos のもつさまざまの意味を、そのままに受け伝えた正統的相続者がラテン語の passion で、その語根 pati- からは‘patient’「病人」‘patience’「忍耐」などが生れたのであろう。このことを言いかえると、ギリシャ語の pathos という言葉は、種々の意味を包含し、そこからはさまざまの言葉が派生する可能性をそなえているだけに、近代語のようにその意味が分析された言葉を以てしては、とうていその正体がつかまれないのである。だから『詩論』の英訳者が、この pathos という言葉を、あるものは「情緒」「情熱」と訳し、あるものは「経験」「彼等の受けたもの」と訳している気持には同情ができるが、どれも一面の真相しか伝えず、むしろこれらをこ

とことく包括したものが pathos の観念だと言えるであろう。

二

この三つの演劇用語を、もう一つ別の観点から眺めてみよう。アリストートルの『詩論』には、悲劇に四つの種類のあることが説かれている。いまトワイニングの英訳に従えば——

There are four kinds of tragedy ..... One kind is *complicated*, where all depends on revolution and discovery; another is *disastrous*, such as those on the subject of Ajax or Ixion; another, the *moral*, as the Phthiotides and the Peleus; and fourthly, the *simple*. (1456 a)

この悲劇の四つの種類の訳語を、例によつて表示すると——

Butcher: complex; pathetic; ethical; simple.

Bouchier: complex; pathetic; ethical; simple.

Bywater: complex; of suffering; of character; of 'spectacle.'

Buckley: complicated; pathetic; moral; another.

Potts: complex: emotional; moral; spectacular.

この中で一ばん問題のすくないと思われるのは、悲劇の第一種であつて、訳語も'complex'と'complicated'の二つに統一され、その筋の中に'revolution'「激変」と'discovery'「発見」とを含むものを、かく名付けるというのである。さて「激変」とは『詩論』の中の定義に従えば、「その戯曲の中において、ある一つの事態から、今までと反対への変化」を意味し、「発見」とは「無知から知識への変化」を意味するのであるが、これを詳説することは、今の場合必要でなかろう。

一ばん不統一だと思われるのは、第四種の訳語であつて、あるものは‘simple’あるものは‘of spectacle’‘spectacular’などと訳し、バックレーのように、漠然と‘another’などと逃げを張つているものがある。これは『詩論』の原文にすでに問題があるらしく、詳しくは専門家の本文批評に譲らなければならないが、しかしこれを‘simple’と訳した人々の根拠は、やはり『詩論』の中の叙事詩の四種類を論じたところに発見される。同じくトワイニングの英訳に従うと——

Again, the epic poem must also agree with the tragic as to its two kinds: it must be simple or complicated, moral or disastrous.....Thus, of his〔Homer's〕two poems the Iliad is of the simple and disastrous kind, the Odyssey complicated (for it abounds throughout with discoveries) and moral. (1459 b)

つまりこの本文によれば、叙事詩は、悲劇と同じく（というのだから、悲劇は当然）‘simple’であるか、‘complicated’であるか、それとも‘moral’であるか、‘disastrous’であるか、であるということになる。もう一つ注意を要することは、悲劇に四種類あるとはいつても、『イリアッド』は‘simple *and* disastrous’であり、『オディセイ』は‘complicated *and* moral’だという本文から推察されるように‘simple’か‘compilcated’かという対立と、‘disastrous’か‘moral’かという対立は、全くちがつた二つの範疇に属している。（その意味をトワイニングは‘its two kinds’という言葉で現わしたのだが、他の訳書にはこの‘two’という字は見当らない。）だから前者の対立を考察することはこの程度に止めておいて、後者の対立だけを眺めよう。

さて悲劇の第二種はトワイニングに従えば‘disastrous’であるが‘of suffering’や‘emotional’という訳語もあり、‘pathetic’というのが目立つている。それが何を意味するかということを、バウチャーの英訳に附けられた註釈に従うと——

Sophocles wrote an *Ajex Oileus*, but as the tragedy is ‘patheic’ it is probably the extant *Ajax* that is meant. An *Ixion*

was written by each of the three great dramatists; Ixion's punishment would supply the pathos. (p. 49)

ここでバウチャーの言つていることは、この第二種の悲劇というのは、たとえば現存のソフォクレスの『エージャクス』のようなもの、イクシオンの物語のようなものだ、というのだが、前者には発狂、後悔、自殺というような重ね重ねの悲運が落ちかかるし、後者はゼウスの怒りに触れて、永遠にめぐる地獄の車につながれたという男だから、いかにもバウチャーのいうとおり「pathos を与えるであろう」が、この場合の 'pathos' の意味は、近代英語における「哀感」というような局限されたものでなく、前に述べたギリシャ語の 'pathos' から、ラテン語の 'passion' に伝わつた大らかなものであろう。又バイウォターの註釈——

If the element of pathos is especially prominent, it is *pathētikē*.

における 'pathos' も同じように解すべきであろう。

こういう風に考えてくると、この第二種の悲劇の訳語がまちまちであるわけがわかつてくるし、'disastrous' 'of suffering' 'emotional' などという言葉が、いずれもこの種の悲劇の特質の一面だけを伝えているにすぎないことが解つてくる。だから 'pathetic' という言葉が一見適切なように見えるが、これも近代英語におけるように——

Exciting pity or sadness; of the emotions. (*C. O. D.*)

という意味だけでは、「災害」というような客観的な側面は、全く現われていないのである。

三

次に第三種の悲劇は、'ethical' 又は 'moral' という訳語が多く、中にはバイウォーターのように 'of character' と訳した人もある。ついでながら 'moral' と 'ethical' とは近代英語でも、ほとんど同意語のようになつているが、これもウィークレーの語原辞典を開くと——

'Moral': L. *moralis*, coined by Cicero from *mos, mor-*, manner, custom, to represent G. *ēthikos*, ethic.

とあり、ちようど'pathos'と'passion'とに劣らぬ緊密な血縁関係にあることが解る。

さてこの第三種の悲劇が、どういうものであるかについて、バウチャーは次のように説明している——

Sophocles wrote.....a *Peleus*.....The plot of Sophocles' play was that Peleus had been driven out of his kingdom during the absence of Achilles, and, while seeking his grandson Neoptolemus, came to Cos, where he died. These plays would have a calmer course, and be adapted for character-drawing. (p. 49)

ここではつきり解ることは、それが'character'を描いているということである。バイウォーターの註釈にも——

If it is mainly a portraiture of character, it is ēthikē. (p. 249)

と書いてある。ただわれわれの起す疑問は'character'「性格」を描いたものが、どういう訳で'ethical'「倫理的」といえるかということである。

この疑問を解く一つの手掛りは、この試論の最初に掲げておいたとおり、ブッチャーのいう「美的模倣の対象」の一つ ēthē (単数 ēthos) が、通常「性格」と訳されているということである。第二にはアリストートルの『詩論』において「性格」といわれているものが、今日のそれよりも、もつと明確な内容を持つているというということだ。すなわち『詩論』の本文には——

「戯曲における性格は、行為者の道徳目的を啓示する。」 (1448 a)

とあり、又ブッチャーの説明には——

Ethos, as explained by Aristotle, is the moral element in character. It reveals a certain state or direction of the will. It is an expression of moral purpose.....of the individual. (p. 340)

すなわちブッチャーは近代語における漠然とした意味の「性格」'character'と『詩論』における「性格」'ēthos'とを

区別し、後者の現わすものは、意志又は道徳目的だとはつきり限定しているのである。もしも性格がこういう意味ならば、なるほどこれを描いた戯曲を‘ethical’又は‘moral’といつても、差支えはないようである。

もつとも『詩論』における‘ēthos’の意味については、ポッのような妥協説もある——

The sense of the Greek word [i. e. ēthos] lies somewhere between ‘character’ and ‘morals’; the old word ‘manners’ (as in William of Wykeham's motto, ‘Manners makes Man’) would be just right, if its meaning had not so sadly degenerated since the seventeenth century. (p. 76)

ポッの所説の後半の‘manners’の説明は、この試論の最初において、筆者が‘manners’はほとんど「性格」と同意語だと説いたことを、裏書きするとともに、一層厳密にそれを修正している感じである。

四

第三の演劇用語‘praxis’「動作」は、まず前述の‘ēthos’「性格」との関係において、考察することが便利であろう。さてアリストートルの『詩論』において、「動作」と「性格」とが一応対立する観念であることは、その中に現われた以下の章句においても明かである——

「悲劇は動作なくしては不可能であるが、性格のない悲劇はあるかも知れない。」(1450 a)

この章句は、演劇批評の歴史において、いろいろの意味に解釈されてきたが、『詩論』における性格の意義が、既述してきたようなものであるとするなら、再検討の必要があるであろう。すなわち「性格」の観念が、意志又は道徳目的を包含するものとするなら、「動作」を伴わぬ意志又は道徳目的というものは考えられないから、「性格」の観念と「動作」の観念が、われわれ近代人の想像する以上に、緊密であつたろうことが解る。

現にハンフリー・ハウスの如きは、その遺著 *Aristotle's Poetics* (1956) の中で、この両者の関係を次のように説い

ている――

「アリストートルの倫理学では……性格は二つの系列の動作――その形成に役立つてきた先行の系列の動作と、それが将来において現実化せられるはずの後続の系列の動作と――の随意的に安定した集合点だと考えられてよろしかろう。性格それ自身は、それが動作に現われるまでは、十分に具現化されないのである。」(p. 71)

このことを言い換えるならば、性格はある一人の人間の過去における動作の結果として形成されたものであるが、その性格がはつきりどんなものであるかは、将来の動作を見なければ解らない。つまり性格は動作に始まり動作に終る。性格は動作の一部にすぎない、というのである。前に掲げた「悲劇は動作なくしては不可能であるが、性格のない悲劇はあるかも知れない」というアリストートルの言葉は、こういうことを前提として、はじめて正しく理解することができる。

このことをさらにおし進めると、さきに述べた「pathos の悲劇」と「ēthos の悲劇」との対立のごときも、むしろこれは「pathos の悲劇」と「praxis の悲劇」との対立と考える方が一層適切であるかも知れない。こういう意味においては pathos と praxis と、すなわち 'passion' と 'action' と、'active' と 'passive' とが対立している。ところがまたある意味においては、pathos も praxis の一部にすぎないのである。

アリストートルは脚色の構成部分を次のように説いている――

「脚色の二つの部分、激変と発見とは、意外感というものに基いている。第三の部分は pathos であつて、これは舞台の上における殺人とか、拷問とか、負傷とか、破壊的又は苦悩的性質を持つた動作であると定義してよろしかろう。」(1452 b)

バイウォーターは、この章句に以下のような註釈を加えている――

「pathos は、発見や激変と同じく、戯曲の中に起る事件の一つであつて、この場合は praxis 又は動作の一部である。

だからアリストートルは、これをある種の praxis だと定義したのだ。……演劇をはなれた場合、pathos と praxis という言葉は、自然的反対語なのだが。」(p. 204)

アリストートルの『詩論』を読んでゆくと、われわれは不思議なことを発見する。二つの観念、例えば ēthos と pathos と、ēthos と praxis と、pathos と praxis とは一応対立しているのであるが、ēthos は praxis の一部であり、pathos は praxis の一部であるといったように、この三つの演劇用語が、いつの間にか praxis の一語に総合されてしまうのである。ギルバート・マレーが『詩における古典的伝統』の中で、「動作」という言葉は——

「広い意味で使用される時は、人々のくらし方と、彼等のなすことと、彼等の送る内的生活とを包含する。」(p. 148) といっているが、彼が「くらし方」('the way the people fare') と言っているのは、意志的でない倫理的でない生活、すなわち 'pathos' を意味するのであろうし、「なすこと」と言っているのは、狭い意味の 'praxis' であろうし、「内的生活」と言っているのは、ハンフリー・ハウスの「二つの系列の動作の随意的に安定した集合点」——すなわちまだ動作に現われぬ前の 'ēthos' を意味するものと解釈してよかろう。

以上三つの演劇用語の中の 'pathos' と 'ēthos' とは、かなり詳細に考察してきたと思うが、それらをすべて包括する観念、すなわち 'praxis' についての説明は、不十分のままである。つまりこの試論の全体が 'praxis' の説明に献げられてきたのだ、とも言えるが、そのくせ何一つとして明確にされてはいないとも言える。しかしアリストートルが、あらゆる詩の根幹と考え、レッシングがすべての時間芸術の本質と考えた「動作」が、一朝一夕に定義されると思う方が無理であろう。フランシス・ファーガソンが『ある劇場の理念』の中で説いているように、「動作」というのは「類推的概念」であって、個々の戯曲に現われた具象的動作との連関において始めて理解されるものであろう。

むしろ筆者がこの試論において言いたかったことは、この三つの演劇用語のごとき批評上の基本観念は、歴史的展開の相において総合的につかむべきもので、分析的な近代語による「定義」によっては、たとえば 'pathos' の一例に

よつても知られるように、とうてい把握できないということである。これを明確にしようとする企ては、かえつてこれを不明確にするという逆説がなりたつかも知れない。

参照書四

Thomas Twining: *Aristotle's Poetics* (1789).

S. H. Butcher: *Aristotle's Theory of Poetry and Fine Art* (1895–1907).

E. S. Bouchier: *Aristotle's Poetics* (1907).

Ingram Bywater: *Aristotle, On the Art of Poetry* (1909).

Theodore Buckley: *Aristotle, The Poetics* (1914).

Gilbert Murray: *The Classical Tradition in Poetry* (1927).

L. J. Potts: *Aristotle, On the Art of Fiction* (1953).

Humphry House: *Aristotle's Poetics* (1956).